4年後に独立 看板広告会社に就職

有限会社アド・プロ広芸社

ティ製作、 や施工、 字本岡字新夜ノ森475-1)は現在も帰 民が一斉に避難。2017年に一部解除 く行い、 工場」を構え、そちらで事業活動をして となりましたが、本社所在地(富岡町大 の事業を行ってきました。 看板など、地域のイベントと連動した 町で毎年春先に開かれる桜まつりの案内 ショナルトレーニングセンター・ を務めています。 開しています。2006年に長男の どを取引先とした地域密着型の事業を展 震災から10年、 還困難区域です。現在は広野町に「広野 レッジでのサッカー大会の看板や、 勲(いさお)さんが入社し、現在、 「看板による地域づくり、賑わい創造」 これまで、楢葉町にあるサッカー 富岡町に避難指示が出され、 2011年3月の東日本大震災 双葉郡8町村の自治体や企業な デジタルプリントなどを幅広

プロ広芸社の剛会長、勲社長が目指す事 浜通りに帰還して事業を再開したアド・ 会社自体も避難を経験し

業展開と、地域への思いを伺いました。

住所:979-0402 福島県広野町大字下北迫字火の口102-1 電話:0240-25-8187

した。 紹介してくれました。最初は、渋々、仕事 をしていましたが、その会社に手書きで看 塗装業をやっていた父(故人)に相談しま 舎じゃ、なかなかそういう仕事もなくて。 の道に進みたい、と思ったが、 う絵を描く職業があると知り、なんとかそ を卒業した時、 そういって懐かしそうに目を細めた。高校 「絵を描くのが好きで、 に憧れていたんですよ」。剛会長は、 すると、いわき市にあった看板屋を 『自分もこんなふうになって すごい職人さんがいて。 「イラストレーター」とい イラストレー 「こんな田

> 立することになります。 実力が認められ、一人で仕事を任されるよ 練習を重ねる鍛錬の日々を過ごし、やがて をやるきっかけになりました」。みたい』と思ったのが、本格的に看板広告 就職してからわずか4年後、 独

親子で会社を切り盛り

ます。

従業員も10 人を超えるようになりました。年に有限会社「アド・プロ広芸社」となり、 父の仕事を手伝うことを決意。 をやっていた長男の勲社長が富岡町に帰り、 そして2006年、東京の大手企業で経理 剛会長が一人で始めた事業も、 勲社長は生まれも育ちも富岡町。仙台の 1 9 8 8

大和田剛 会長 あっ 社員にも少し気は遣うしね。でも今思う でのタイミングでした。 もできないしね。長く勤めてくれている 兼ね合いもあるから、 事業も順調で、社員数も増えてきた中 ちょっと気を遣い過ぎたところは たかもしれない」 息子だけ特別扱い 「他の社員との

働く社員は社会の公器 一員

過ぎるぐらい気を遣った理由「 息子と、他の社員との関係に、気を遣い 入社し、後継者候補として仕事をする

同社は、 どもの夢を育てるおもちゃで知られてい もゆかりのある大手の玩具会社「タカラ卒業。その後、一部上場企業で、福島に し、リカちゃん人形やチョロQなど、子 大学で経営学を学び、簿記の専門学校を ダッコちゃん人形で事業を拡大 で4年間、 経理を務めました。

状況と、 税理士など専門の方向に進んだら、食 半分」と当時を振り返ります。 どうしようか、 た。 とは思っていましたから」。 調でした。将来はうまくいきましたら、 ううれしさと、他の社員との兼ね合いで 岡町の実家に戻って働こう』と決めまし いっぱぐれがなくていいんじゃないかな もともと数字が得意で、東京の会社で順 の3人暮らしでした。当時を振り返り、 「人員整理的に厳しかったという会社の 勲社長は2003年に結婚、 剛会長は「跡継ぎができたとい 自分の年齢を考えた時に、 という戸惑いとが、半分 妻と長女 「息子は

ことの意味を置かないといけないと思っ ばいけない。社会のお役に立てているの 売っているものが社会の役に立たなけれ 会の一員として存在している」という強 ない。会社は社会の公器、家族とか親子関係でやって ていますからね」と、剛会長は確信を秘 か一そこに会社としての存在意義、 めた表情で静かに言葉を続けました。 い意識がありました。 会社は社会の公器、働く社員は社 剛会長の中に、 「作っているもの 「会社経営は、 いくものでは 働く

どう感じていたのでしょうか。 こんな父・剛会長の思いを、 勲社長は

入社直後から無我夢中で『アド・プロ広 も少しあったかもしれません。 芸社という会社はどういう会社なのか』 『経営者の息子』という雰囲気が社内に 「普通の会社であれば新入社員ですが、 でも私は



経営計画発表会の様子

-2-

-1-

富岡

J ヴィ

のナ

社長

【業務内容】

【果房内谷】 看板、ステッカーなど表示に関する広告物の製作 から設置まで、トータルで業務を行います。 ex) 屋内外広告物設計・製作・施工、ステッカー、 切り文字シール、マグネットシート製作、 イベント看板、横断幕の作成など

富岡町に創業しました。

屋外看板の設計

企画デザイン、企業のノベル

父で会長の大和田剛(たけし)さんが

アド・プロ広芸社は今から約45年前、

で地域づくりに貢献富岡町で創業 看板広告業

大和田勲 社長

てていませんでしたね」。 の公器』というような広い視点はまだ持 うと思っていました。ですから、 知ること、客観的に観ることから始めよ 『社会

社では働いて給料をもらうだけだった 感じました。振り返ってみると、前の会 仕事をしている会社、というやりがいを 地域に暮らす人との関わりが生まれ、 広告業を通じて担わせていただくなかで、 ります。その役所の仕事の一端を、看板 感します。 頻繁にやり取りする機会があることを体 自治体・役所の仕事を積極的に受注し、 貢献することが存在意義の一つにあ だけれども、 「役所は、住民サービスの向 入社後から、 地域に根差した

YELL Vol.21

激を受け、成長していきました。れること。その大きさに勲社長自身実際に仕事をしてみて分かること、 大切さを実感することができました」 義や納得感、思いをもってやれる仕事のかもしれないけれど、弊社で、仕事の意 その大きさに勲社長自身が刺 得ら

地域社会をつくる看板広告

さを伝えたい、 ケのお店があり、 一例を挙げると、地元でおいしいコロッ お客さんの代弁者のような気がします。 看板広告業。剛会長は、その意義を次の ように語ります。 地域や地域住民とともに成長していく おいしいから買ってもら 多くの人にそのおいし 「自分たちの仕事は、

> それを、 成功で、 ザイン、文字を見て『おいしそう』と感 なあと自分でも思います」 ことになります。こういう仕事は大事だ じて店に立ち寄って買ってもらえたら大 き交う人が常に見ていて、看板の絵やデ 看板は常に固定してあるので、 広告の役割が果たせた、という 看板を通じて多くの人に伝えて

> > 数あり、

それらをそっくりそのままにし

前まで稼働していた印刷機材や資材が多 社の建物の中には、当然ながら、震災 としか言いようがなくて。

」富岡町の

度寄与しているとも思いますしね。 とで、交流人口や利用客増大に、 ります。ここに何があるよと知らせるこ が高いと思います。例えば、 について、剛会長はさらにこう言います。アの一形態としての看板広告のやりがい **がたいですね」。** 各地でそういう自分たちの思いを理解し 双葉郡8か町村で事業を受けていますが、 するときには、そういう様子を頭の中に 案内板などで、町に人を呼び込むお手伝 てもらっているのは、 入れて取り掛かるように心掛けています。 いをしているという自負は、昔も今もあ 「この仕事は建設業と似ていて、 多くの人の役に立つ情報提供のメディ うれしいし、 看板広告や ある程 公共性 製 作 あり

帰還困難区域に東日本大震災と原発事故で

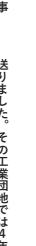
作業室の様子

引先も、 会社の仕事も突然の休業に。剛会長はみな、各地に避難していきました。当 仕事一筋の半世紀でしたからね。 命令が出て、それまで仕事をしていた取 原発事故が起きます。富岡町は全町避難 年3月、突然の東日本大震災と福島第一 「完璧に五体をもぎ取られた感じ。 ところが、事業も順調だった2011 地域の仲間や友人、親戚たちも 私は 当然、

います。 業し、その後、広野町で事業が再開して 送りました。その工業団地では4年間操

新しいものに挑戦できる震災後だから|

光掲示板で広告を流したり。デザインや 動画、音声などのデータをスマートフォ 画面を通じて動画のコマーシャルや、 例えば、デジタルサイネージ。モニター 術的にはさまざまな変革も起きています。 の再開後と、 仕事の中身は、 広野町で事業を始めてまもなく4年。 あまり変わりませんが、 震災前、 またいわき市で 電



ンでやりとりして、 メディアで放映する。

てみた

福島のいわきにも住まいを持ち、

週末は

勲社長の妻子は茨城県で生活し

そんな感じだったと語ります。

込んでも結果は分からない。

まずは動い

と考える時もありますよ」。しかし考え



サポー

しようと思いました。経営者と

かな、と考えました。まずは父の仕事を はなくても、地域のお役に立てればいい

勲社長は気持ちを切り替えて、

えていましたね」。

剛会長も「当然、

して、そして同時に息子として、そう考

あのまま茨城で就職していたら、 事がないのは分かっていたんで。

こぢん 息子も

まりとしたサラリーマン生活で生きて

いっていたかも。それを邪魔したかな、

Vol.21 YELL

は茨城に避難していた時、「仕事がないもちろん不安もありましたよ」。勲社長うしたら再開できるかを考えていました。 2011年の末、 のではないか、という不安も出てきて、 けて就職したら、 なかで、福島に戻ることも決断できなく を再開するという気持ちをなくさず、 田市、三春町など避難先を点々としまし まさに膠着(こうちゃく)状態の中、 あの時は踏ん切りがつかない状態でした た。その中でも剛会長は「もう一度仕事 震災後、剛会長、勲社長は、茨城県鉾 同時に、このまま茨城で仕事を見つ 先にも進めず、 剛会長は重大な決断を もう福島には戻れない 戻れもしない ど

「事業を再開する」ということでした。 剛会長がした重大な決断一それは、

わき市の工業団地で事業

条件で、 した。 地で、 て、 ていた町への思いがふつふつと蘇ってき んだけどね。震災が起きて、昔から抱い なければ、苦労しなかったかもしれない 上がろう、 で何とかしたいという思いで、さあ立ち しかなくて。被災した町や地域を看板業 とができました」と剛会長。 のプレハブの事業所で事業を再開するこ た会社に土地と建物を準備する』という 「自分にできることと言えば、 2012年の3月から、 そこに応募したら、 『被災した自治体で事業をしてい 事業再開企業の募集が始まりま と。まあ、こんなことを考え いわき市四倉町にある工業団 幸いにも通っ 工業団地内 看板業

たようなところもあるんですよね」。

意義が浸透していたのでしょう。 らない」。しかし、剛会長の会社の存在 するというけれど、 には不安がよぎりました。 剛会長が事業再開を決めた時、 仕事があるかはわか 「事業を再開 勲社長



看板修繕の様子

中では辛い思いと、もう一度何とか立ち

れぞれの道を歩み始めたのですが、私の

先も見えないし。

今は、その従業員もそ

時は最悪でした。気持ちが折れているし、 きた従業員を解雇せざるを得なくなった

上がりたいという思いが混在した感情が

しばらくありましたね」。

言葉を選びな

少し寂しい表情がのぞきました。

任でこうなったわけではないとは思っ

います。でも、ずっと一緒に仕事をして

くなったこと。剛会長は「自分たちの責た従業員11 人を一斉に解雇せざるを得な

痛恨だったのは、それまで勤務して

りました。

会社の資産はまったく使えない状態にな るため、それらを持ち出すこともできず、 て、突然の避難開始。放射能の影響があ



災害時集合場所の貼り付け作業

取り入れています。 日進月歩の技術を、 アド ・プロ広芸社も

そしてこう付け加えました。

いきたい。 ジし続けてきましたからね」と剛さん。 テクノロジーを取り入れ、 人個人、 を磨いて、 弊社でも、試行錯誤をしながら、 ういうものが普及している気はします。 が根付く気がしています。浜通りでもそ 報を取得して広く知らせていくパターン 「これからは、 やったことのないことにもチャレン 老若男女が情報発信したり、 震災後は、そうした新しいも 新しいものにチャレンジして SNSなどを使って個 対応する能力 技術と

「町を何とかしたい

を見つめてきました。 町内の自分の生家に立ち寄り、 剛会長は時折、 許可証をもらって富岡 その様子

> 歳 も 60 います。 らかった。戻るっていっても、 が少しずつ朽ちていく。それが本当につ て、本当に欲張りごとゝ、、を何とかしたい。仕事も何とかしたい。仕事も何とかしたい。町 なんかなかった気がするよ。それで、町ろ、ふるさとがいいんだね。そこに理由 強かった理由はよくわからないけれど、 もならない片付けをやるだけなんだけど 「時々戻って自分の生家に寄ると、家 ふるさとに戻りたいという気持ちが 近くなると、 自分の生まれたとこ 片付けに

変だよ。 をして、 した。 なっちゃうけど、あの事故は起きてはな 際には圧倒的多数の人が立ち上がれては 上がってやっている人もいるけれど、 が途中で打ち切られちゃって、 いってしまうんだ」と寂しそうに話しま らなかったと思う。 いない状況がある。その意味では愚痴に きないんだからね。自分たち以外で立ち して、対処してきたけど、まだまだ大「原発事故の後、みんないろんな経験 事故前まで順調にきていた計画 どうしてもそこに 予定がで 実

何かを創り出すことはできないだろうか壊れていくだけの姿を見るのはつらい。 へ参加することになります。 戻った後も、 そんな思いから2人は、広野町に より積極的に地域貢献活動

子供たちの教育充実に貢献富岡町の教育委員として

ても戻りたいと切望していた故郷へ一。避難している時から、どんな状況になっ 伺い、 なかった。 現れる』と。 たが、 にしました」。最初は何をやるのか まるで天から降ってきたような、

ありがたいと思い、お引き受けすることくないし、教育について話が聞けるのは 荷が重い」と、最初は断ろうと思いまし 話に、勲社長は「自分は畑違いだし、 「富岡町の教育委員をやってみないか」 今から4年前、 『乗り越えられる壁だから、壁が 「推薦してくださった方の思いを 町のために何かやることは悪 父に相談してみたら反対し 勲社長に一本の電話が。 突然の

て

くのか、

そもそも子どもは戻るのか

- 5 -

校を再開するときに、どういう学校にし

の大変さがあります。

いずれ富岡町で学

しましたが、

避難先での授業や学校行事

分からなかった教育委員の仕事も、 学校行事に関わるようになり

出席や、小中学校の卒業式、入学式、着は2期目に入り、毎月1回の定例会への を仮校舎として富岡町の小中学校が再開 校になりました。三春町の閉鎖した工場 教育現場の様子が見えてきました。 任式など、 「震災直後、富岡町の学校はすべて休

寒ふるタウンここなら笑店街 アド・プロ広芸社で作 **した楢葉町商店街の看板**

リット」 を自由に担えるのがまちづくり会社のメ たところで、まちづくりや地域の活性化 できないことや、行政の規制概念を離れ はどうしてもお役所主導。でも行政では 「まちづくり会社は震災後の自治体で

Vol.21 YELL

も大事です』と、折に触れておっしゃっ

安全に学べる環境を整えることが、とて

当時の教育長が『子どもたちが安心・

ていたことが心に残ります。

」現在、富

岡町で学校が再開して約3年が経ちまし

今現在も三春町にも学校があります

ります。

町に戻る準備と、

新しい体制づ

来年の3月には閉校し、

富岡町に移

えています。

してまちづくりに貢献「とみおかプラス」代表と

にも貢献していくだろうと、

勲社長は考

くりが、これからの富岡町のまちづくり

めました。新聞業者がいなくなったので住民や来訪者に必要なサービス提供を始 移住・定住情報も提供しています て、 資産相続手続きの窓口にもなりました。 解除になり、 いました。地域の生活情報や観光案内、 スタッフがどんどんアイデアを出し合っ 新聞配達をし、 2017年4月に町の一部が避難指示 夏のお祭りやライトアップ事業も担 足りないことを補おうと、 家や田畑の不動産管理

か 。 どうするかということ。この辺を担って 者・ばか者が担うと言うじゃないです いきたい。まちづくりは、 を増やすには、賑わいづくりをするには、 「町の喫緊の課題は、移住・定住人口 よそ者・若

事だったことから、

代表に白羽の矢が立

社団法人

とみおかプラス」

の代表とし

ての仕事です。

剛会長が町の観光協会理

岡町に設立されたまちづくり会社「一般

剛会長も、

積極的に地域活動に参加し

います。その一つが、

2017年に富

信し、住民らの交流を深める活動をして郡未来会議(震災後から地域の情報を発 線開通になりました。その際には、双葉 に鉄道沿線で掲げ、 ピンクの横断幕を作成し、 きた団体)とともに、 2020年3月には、 開通を祝いました 桜をイメー 仲間たちと共 R常磐線が全 ジした

挑戦し続けるこれからも持続性をもって

仕事について、考えていること、 いることを伺いました。 間もなく震災から10 年を迎える地域と 感じて

思います。 戦し続ける精神を語ってくれました。 それでも地域に必要とされる会社、 状況で変わることがあるかもしれません。 最先端でなくてもチャレンジして、 会社であり続けたいと思います」と、 のイノベーションに貢献していきたいと を目指していますが、看板広告の事業で コースト構想で新しい技術の開発と集積 ていき、展開していけたらいいなと思 のデジタルサイネージを少しずつ手掛け 勲社長は「仕事では、引き続き新分野 ・プロさんでよかったね』と言われ 地域については、 もしかしたら、会社の業態が イノベーション 地域 ァ

がないからね。 り組まないといけない。 持続可能なまちづくりに役所も民間も取 長も言ったけれど、時代のニーズに合っハハハ」と豪快に笑います。そして「社 ルじゃないよね。 たらいいなと考えています。 人のネットワークと連携を増やしていけとみおかプラスを中心として、いろんな の人口だったのが、今は8百人ぐらい。 た新しいテクノロジーの流れにも乗って いきたいね。富岡町は震災前1万5千人 剛会長は「まあ、潰れない会社だね、 ハハ」と豪快に笑います。そして「社 持続性が大事だと思うんだ」 地域づくりに取り組むの 時代の流れって切れ目 そして今はゴー その点で、

採用と教育研究所

saiyo to kyouiku kenkyujyo

志ある中小企業経営者の応援団として 「採用から共育」まで一貫した支援サー ビスを行っている。これまで数多くの社 員、職員の採用・人財育成・職場定着等 に携わり、CSR(社会貢献活動)を活用した 「いい会社創り」のサポーターとして定 評がある。



YEŁL

Vol. 21 2021年3月11日

発行:採用と教育研究所 〒960-8055 福島県福島市野田町6-7-8 電話 024-529-5153 info@saiyoutokyouiku.com

